

---

# 柏市立の、とある中学の茶道部員

市場良子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

柏市立の、とある中学の茶道部員

### 【Nコード】

N9262S

### 【作者名】

市場良子

### 【あらすじ】

茶道部員が、茶道に全く関係ない話で盛り上がる。

12人の怒れる男のように、茶室で繰り広げられる事件や出来事の考察と展開。たかが中学生だが、どこまで真相に肉薄出来るのか……

## 予感（前書き）

茶道部員が、茶道に全く関係ない話で盛り上がる。

12人の怒れる男のように、茶室で繰り広げられる事件や出来事の考察と展開。たかが中学生だが、どこまで真相に肉薄出来るのか……

## 予感

ここはかの有名な寺である布施弁天。

ではなく、その隣にある日本庭園の中にある家屋の前。

柏市立柏第〇中学校の茶道部員は年に数回、茶室が備わっているここに集う。

彼らと彼女らは月に数百円の部費を支払うことで家屋のレンタル代を捻出する。もちろん、顧問の先生方の『金銭と時間の積極的投資』がレンタル代の多くを占めているのだが、年端も行かぬ子供たちである。現実を知る年ではない。

ちなみに正式には部員ではなく、同好会員である。現時点では。

さて、あけぼの山公園を慈愛の目で展望する布施弁天の麓で、彼らと彼女らは何をどうするのか。

この問いに対し、多くの方は疑問に思うことだろう。茶道同好会が茶室で何をするのか。決まっているだろうと。確かにそうだ。それは決まっている。だが、部員にとってはそれはメインではない。

たかが中学生でしかも同好会。本気で茶道を学ぶのではない。最低限のマナーを身に着けることが目的と、彼ら彼女らの認識は一致している。

はっきり言う。ある種のドラマを求めているのだ。中学生のくせに。

能動的で、渦潮のごとくドラマの数々が収斂していく体育会系の反対、文科系のくせに、彼ら彼女らは非現実を求めて月々の小遣いから部費を出す。

ちなみに通常時は、月に三回程度の活動で欲求を収めている。顧問の先生が大変だから、というのもある。

とにかくにも、彼ら彼女らは何か面白いことを求めて一つの舞台に飛び込んだ。たまたまそれが茶道同好会であっただけである。決して頭が弱いわけではない。

ああそうだ。中学生にしては頭は弱くないのだ。ではさっそく舞台に上がり、紹介しておこう。

家屋に入って玄関を上がり、すぐに水屋だ。水屋とは要はアレだ。舞台裏だ。いちいち茶を作っては時間が無いから、茶室で数人分作ったら、後は水屋で茶を立てるのだ。だからさ、本番だと時間が無いの！

その水屋に男子と女子が入り混じって、なにやら話している。とはいっても、性別ごとに固まっているようだ。

まずは男子から。彼らは同好会実施時に和服の着用が義務付けられている。夏は制服を脱いで、冬はもっこりと制服の上から和服を着る。さすがに、体育祭の部活対抗リレーの時は先生に着用を止められた。洗濯が面倒だからだ。ちなみに男子は三年生しかない。茶道同好会に入る男子なんてキワモノと決まっているのだ。

最初に紹介するは、守山直樹君だ。どうやらベルトを忘れて、フ

オーマルなふくさの掛け方では無くなっているようだ。詳しくは自分で調べるとよろしい！

彼はサブカル好きっこである。とは言っても、シャブシャブ風呂に浸かっているのではない。要はマイナーが好きなオタクになりきれてないオタクである。結構面倒くさい奴だ、これが。何せ給食時に配膳トレーを持ちながら、ラスコーリニコフがいかに屑であるかを自慢げに語ってみせるのだ。友人からすればたまったものではない。

次に紹介するのは、片峰相馬君だ。守山君の話に付き合ってやっているその姿、格好良いぞ！

これは何と言うか、中学生にしては中々のオタクである。具体的に言うと、クラスの体育会系や肉食系連中に堂々と『お勧め』をして、こちら側に引きずり込むのが巧い。そして頭がそこそこ良い。ただ注意が必要だ。こういうのは同級生からは神扱いされるものの、その空気に慣れてしまい、数年後もしくは数十年後にかつて格下だった者に言葉でレイプされる危険性がある。さてさてこいつはどうなることやら。

最後の男子、杉良平を紹介しよう。

いわゆるアレだ。「優しい人だね」って言われることの多い人。こういうのは将来、肉食系になることは滅多に無い。貴方の周りにもいなかっただろうか？優しい人という評価を貰い続けた草食系、もしくは優柔不断、もしくはナヨナヨしてる奴が。今後の動向に期待である。

ちなみに彼はニコニコと守山と片峰の二人の会話を聞いているだ

けだ。いるよね。三人以上になると発言頻度が異常に低くなる人って。

さて、お待ちかねの女子の紹介だ。ただ一つ言っておく。現実とは虚しいものだ。貴方の周囲に居ただろうか？文科系の部活動や同好会に所属している子で、ルックスが中々宜しい女子は。もし居たとするなら、おめでとう。そして残念だ。可愛い文科系女子は七つ葉クロバーのように「結構存在しそうで実は貴重な存在」であり、そして大抵は進学につれて肉食系に変化する。

つまり何が言いたいかというと、可愛い子は居ないということを伝えたい。

まずは手水鉢で一心不乱に手を洗っている女子、安藤凜を紹介しよう。ちなみに手水鉢とは神社とかでよく見る手を洗う桶だ。さらに蛇足情報。「つくばいは勿論、外に存在する」。つまりだ、インフラ万歳、水道万歳ってことだ。意味がわかる？

彼女はまあ、なんだ。意味がわからない。そもそも手水鉢で一心不乱に手を洗うという情景を貴方は想像できただろうか？でもなんとなくわからんでもない。だって手水鉢のあの容積で、手洗いに納得出来る？最後は柄洗うし。

次に顧問の先生が買ってきた和菓子を検品している女子三人を紹介する。

まず一人目は佐賀公子。ふくよかな女子だ。違う。間違えた。太ってる女子だ。

彼女は立派な精神の持ち主だ。勉強を苦に思わず、問題が発生し

た時は同級生の誰よりも適切に行動できる。だが、改めて言う。文科系に可愛い子はいない。そうなのだ。天は二物を与えないのだ。天は彼女から容姿を取り上げたのだ。

二人目は染谷夏目。クラスで二人くらいはいる、ミステリアスな女子。要は、何を考えているのかわからない女子だ。こういうのは図書委員に立候補しそうで、成り行きで環境委員に入ったりする。先生から見れば便利屋のようだ。だいたいさ、クラスの委員決めて揉めるじゃない？

彼女は安藤凜とは別のベクトルを持っている。染谷は普通に人付き合いが出来るのだ。ただ、腹の底がどれほど深いのかは誰一人把握していない。

最後に宮根京を紹介して終わりだ。なんとなく和菓子をつめる目が妖しいのは黙っておこう。

男子との接点がわりと高い。だが、それは良い意味ではない。なんというか、男子がふざけていると、決まって彼女にエンカウントするのだ。クラスに一人はいるよね。こういう面倒臭いの。女子からは頼りにされているか、同様にうざがられているかの二択だ。さあどっちだ。

これで『この場にいる』茶道部員の紹介は終わる。ちなみに、ここにいる全員は三年生だ。

ちょうど紹介が終わったところで、怪しい動きが出てきた。先生を探してくると言って、杉良平君が席を外すと、守山君と片峰君が片隅に移動して怪しい顔つきでひそひそ話を始めたのだ。



それはまるで、小学生が出来の良い落とし穴を思いついたような顔つきだ……

## 予感（後書き）

作風変えてみました。読み返すたびに、私の自尊心が色々とアレになっていく。

あ　わ　い　る　ど　　る　う　も　あ　　（奇怪な風説）

「あと何分よあれ」お菓子の検品を終えた佐賀は、横目で守山君と片峰君を見ながら染谷と宮根に聞いた。「一時間と三十分はあると思う。みんな早すぎなんだよ」宮根がそう答えた。

その答えで一息つく佐賀だったが、芯から休んでいるといったわけでは無いようだ。

「みんな張り切るねえ。男子も普段からこれくらい早ければいいんだけど」染谷が暖かい口調でシニカルなことを言う。

「守山は早く来てるじゃない」佐賀は普段の様子を思い出す。

今は夏休み中盤。最後の活動は6月だった。佐賀の記憶によれば、守山は相変わらずの早さで部室に來たはずだった。

「早く来てるだけであって、仕事しないじゃない……今も何アレ？男子だけで話してさあ、仕事してないじゃん。片付けは男子にやらせようよ？」宮根がうざったそうに言う。正論なのに、すごくウザイ。

「それもそうね。っていうかさ、隅っこのあの二人、ウチらのことと見てない？」佐賀は宮根に正面向いてそう言った。気取られないよう視界の隅で対象を見るのは、この年頃の常套だ。

「話しかけてみれば？」そう言ったのは染谷である。聖母が子を抱くような顔つきでこの発言だ。

あの二人はマークしとかなきゃね、と佐賀は呟いた。それから情性なオットセイのように、水屋の隅で座って談笑している彼らに近づいた。

「あつ。なんか来たよ。これはよろしくないねえ。イカンねえ」  
守山君はにこにこと言った。

「どうかしたのか佐賀？」片峰君も普段は全くしない、笑顔という状態で佐賀を迎えた。

「私たちが準備終わらせたからさ、君たち男子が後片付けしてくれないかい？」

「あー、良いよ任せろまじで」

「おっけい」

二人の返答を聞いて佐賀はくそ真面目な顔でこう言った。「後で確認するから、やっぱり動かないで。二人ともノリが軽すぎて心配になってきちゃった」

「なーに言ってるの佐賀んは」守山君はにこにこからニヤニヤになった。

「どっちでもいいわ俺は。とりあえず結論は早めに頼むわ」片峰君は普段どおりの表情に戻った。

「また後でね。っていうか二人ともさっきから何話してるの？」

佐賀の発言は二人を驚かせたらしい。「なぜ察するし！」「あん

だよ！気づいてんかよ！」

「何？気になるんだけど」

「えー、どうするん。もう言っちゃう？」 「んー予定外だけど、もう巻き込んでやろうか」

「巻き込む？」 佐賀は顔に警戒の色を濃く表した。

「よし、全員集めるぞ」 片峰君がそう言うのと、守山君は立ち上がって「全員集まれー」と、勇みよいラッパ持ちのように号令をかけた。

そして二人の前に集まったのは、杉君を除いた全員だ。

座った女子を前に立った男子が対峙している。その構図は何か、事件の始まりを象徴しているかのような。

守山君が半歩前に出てこう言った。

「君たち、あれを知っているかい。今学校で話題の、事件」

仰々しい守山君の言葉はどうしても反発したくなる。案の定、宮根が喰い付いた。

「ちょっと、さっさと用件を言えよ」

「まあ、時間は平等じゃないと言うしな。では申し上げてしんぜよう」

染谷がそこで茶化した。「謙讓語の後にしんぜようって面白いね」

「守山、話が進まんぞ」片峰君のキレの良い言葉で守山君は咳払いをした。片峰君格好いいよ！

「あー、みんな。メット男の消失事件について知ってる？」

以外にもその話題に喰い付いたのは安藤凜だった。

「知ってるそれ！ヘルメットを被った男の人が教室に入ってたけど、消えたっていう怖い話だね！私知ってるよ！」

「おお……安藤氏はご存知だったかい」

「私も知ってる。っていうか知らない人はいないんじゃないの？」  
宮根が棘の刺さった口調で言う。

「うーん。それを下級生が話してるとこ見たことあるなあ」

染谷がそう言うと、片峰君が応酬した。「一年生にも、ここだけの怪談話として広がりつつある」

「ここだけ？」佐賀がそう言うと、守山君が顎に手をかけてこう言った。

「花子さんとかコックリさんのようなメジャーなものではなくてな、土着的というか。とにかく、他の学校にはない話として知られてるそうだ」

「それで、どうかしたの」佐賀は言う。

「君たちの見解を聞いておきたいんだ。軽くでいいから分析してみてくれ」守山君の願いは女子を混乱させたようだ。

「ねえ。何が目的なの？」

宮根に対し「今は明かせない」と片峰君が言う。

「まあ、良いんじゃないかな」そう言った染谷に佐賀がたずねる。  
「こういうの好き？」

「いや、全然」予想通りだったようで、佐賀はそれ以上聞かなかった。

「今言ったように目的はまだ教えられないが、とにかくみんなの知ってる情報とか、閃いたことを聞きたいんだ。駄目か？」片峰君の言葉に佐賀が答える。

「時間もあるし、ネタになるかもしれないから私は乗るわ」

「助かるよ」守山君が言う。

「私もいいよ。宮根もいいでしょ。凜ちゃんは？」染谷の言葉に二人が反応する。

「暇つぶしだと考えるわ」

「うん！私も大丈夫だよ！」

ひどくご満悦な顔を守山君は作る。片峰君は少し顎を下げたくら

いで表情の変化は外からではよくわからない。

そして茶室に彼ら彼女らは入っていった。

活動時間より前なので、正座で座るものはいない。

手前座とか客座とかも関係ない。

障子を通り抜けて陽が畳の上に柔らかく伸び掛かる。

「まずはメット男の消失をどれかに限定しなきゃね」

佐賀の言葉に宮根が言う。「限定ってどういうこと？」

「私は一つしか知らないけど、噂話はたいていバリエーションがあるものでしょ。一つに決めないと考察は出来ないわ」

「オリジナルがどれだかわかるなら、だけど」染谷の言葉に佐賀は答えた。

「バリエーションっていうのはつまり、『洗練』よ。ありのままの話は自然と脚色されていくの。逆に言えば、全員の知ってる話をまとめて、一番地味もしくは衝撃に欠けるものがオリジナルとはいえなくても、オリジナルに近いものと言えるんじゃないかしら」

「佐賀すげえな」片峰君の口から感嘆の言葉が漏れる。確かに佐賀の話は中学生にしては中々やるほうではないだろうか。中学生にしては、だが。

「いや、そんな面倒なことはしなくていい。オリジナルを俺がこ



れから話すからな」守山君の言葉に片峰君を除いた全員が反応した。

「なんで断定できんのよ！」どうしてだろうか。正論なのに、宮根が言うときいまいちつかず！

「とにかくそういうものだと言いつけてくれ。それじゃ話すぞ」

守山が語った話は次のようだった。

それはあまりにも味気ない話。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9262s/>

---

柏市立の、とある中学の茶道部員

2011年10月8日23時29分発行